国際ソーシャルワーク教育年表に見る A.ザロモンの位置

—比較ソーシャルワーク教育史試論のたたき台として

岡　田　英己子

＜要旨＞

A.ザロモンとベルリン女子社会事業学校とは一体化の関係にあるが、それを他国はどう評価しているのか。合衆国側情報に偏在した国際ソーシャルワーク教育年表に依拠して、他国の目線を取り入れて対処するザロモンの資質と、彼女が国際通とされる根拠とを、比較考察した。ヨーロッパ大陸型社会事業教育モデルの提唱者とされるザロモンの国際評価はパリ国際社会事業会議で定着するとされるが、内実はそう単純ではない。まずドイツ女性団体連合が、次いで国際婦人連合が、彼女の国際評価の下地になるからだ。この間のザロモンの動きから比較ソーシャルワーク教育史試論のたたき台が見えてくるのだが、本稿では年表解題の手法で初期社会事業学校の格付けの裏面を概観するに留める。なお巻末年表は社会福祉史入門教材としても活用できる。

＜キーワード＞

ベルリン女子社会事業学校, 初期社会事業学校, 比較ソーシャルワーク教育史, A.ザロモン, セツルメント,ドイツ女性団体連合（Bund Deutscher Frauenvereine, BDF）, 国際社会事業会議（International Conference of Social Work, ICSW）, 国際婦人連合（International Council of Women, ICW）

Ⅰ．序―比較ソーシャルワーク教育史試論のための年表解題

Ⅰ－1. いかなる条件で福祉の職業化が始まるのか―その指標にされる初期社会事業学校

20世紀を通して、欧米先進国や日本では保健医療・福祉・教育の仕事が、飛躍的な拡大を遂げた。これら人が人を援助する対人援助の職業集団なくしては、福祉国家体制は成り立たなくなっている。しかし、福祉国家が再編を余儀なくされる現在、ひとたびは確定されたかに見えた援助の職業像もまた揺らいでいる。

むろんこうした揺らぎは一概に否定されるものではない。というのは福祉職の場合、その職業像の不確実性は、21世紀の当事者主体の援助論を先取りするものでもあるからだ。不確実の時代を生きる私達に、顔の見えない連帯を気づかせるのは、援助の関係性に内包される「社会的なるもの」を介してであり、その援助論は社会の冠が付く社会事業の登場を待たねばならなかった。

そもそもソーシャルワーカーの名称で知られる福祉職は、社会事業「成立」期に登場するのだが、常に「何が福祉の仕事なのか、他の対人（援助）サービスの職業とどう違うのか」の説明がしにくいジレンマを抱えこんできた。保健医療や教育が援助の目標設定や結果の可視化を進め、一定の専門職性の認知に「成功」するのとはかなり対照的で、「福祉の仕事」の担い手たちは職業アイデンティティの喪失感に、さいなまれやすかった。

この問題は早くから関係者には自覚されていた。特に19世紀末/20世紀初頭に職業化の先鞭を付けるイギリス・ドイツ・合衆国の社会事業教育関係者には、専門職性の付与こそが緊急の課題と映った。ほどなくこの三ヵ国で社会改良思想・運動の潮流に乗る世代が、自らの博愛事業・ボランティア活動を自己否定する形で、「福祉の仕事」を「社会的なるもの」の政策理念に押し上げ、有償の福祉職を創出する筋道を確保する。こうしてほぼ共時的に初期社会事業学校は登場する。設立者達はおおむね社会事業の「成立」宣言の論客とされ、講義用テキストの類でも代表的な社会事業・教育論ともてはやされる。さらに社会事

業学校の養成教育によってこそ、福祉職の専門性・専門職性が担保されるとの主張も、早々と1910年前後に定着する[1]。初期社会事業学校の教育が、他校・他国で注目されていく時期である。

ここで双璧をなすのが、ドイツと合衆国である。博愛事業では他国の追随を許さないイギリスではあるが、社会事業学校の養成教育に関しては戦前ヨーロッパではドイツに敵わない。A.ザロモン（Salomon, Alice 1872-1948）とベルリン女子社会事業学校（以下、原則としてベルリン校と略記）の存在感の所以である。かくしてナチが政権を掌握するまでは、合衆国とドイツの社会事業学校が拠点となって、社会事業・教育論の主導権も握り続ける。両国は大西洋を隔てて競合しながら、援助職では後発組みである福祉職の制度的確立と、専門教育の重要性を唱和する一群となり、国際ソーシャルワーク教育の礎を築いていく。

Ⅰ－2. 研究の対象・方法、手順

さて、職業像の不確実性や職業アイデンティティを喪失しやすいとの認識はザロモン世代の学校関係者は共有していたから、社会事業教育の専門性を確立する尽力は国内にとどまらない。その最たる動きがパリで開催される1928年第1回国際社会事業会議であろう。本稿ではこの国際会議に注目して、ベルリン校が屈指の名門校であるかのように格付けされる背景を探る[2]。手法はシンプルで、一枚の年表に依拠して、他国でザロモンがどう評価されているかを通して、年表事項の偏在や選択基準を読み解いていく。

ニューヨーク、ロンドンと相並ぶ初期社会事業学校として格付けされるベルリン校。いかにして短期間で名声を獲得したのか。また程なくして看過されるのは、何故なのか。その背景をソーシャルワーク教育史上で定説とされる年表事項と照合しながら、探っていく。本稿末尾に掲げる年表は、アメリカ・コネティカット大学ソーシャルワーク校のLynne M.Healy著『国際ソーシャルワーク(International Social Work)』巻末資料で（Healy[2001]290-293)、国際ソーシャルワーク／ソーシャルワーカー機関の基準になるもの。ドイツ側の目線で一読すると――つまり嵩上げのためのザロモンの知恵と工夫を脳裏において読み解く

ならば――情報に少なからず偏在があることは一目瞭然だ。

以下、まずⅡで年表に依拠して、盛り込まれた英米圏歴史叙述の選択基準や、ドイツ社会事業教育の記載の正否に関わるザロモンの対処を見ていく。Ⅲでは、一時期はヨーロッパ大陸型社会事業教育モデルとされながらも、それが1930年代に入ると消失する経緯をザロモン個人の資質に絞って考察する。ベルリン校への思い入れと、その格付けに必死であった彼女を冷静に観察すると、虚飾に蔽われた素顔が浮かび上がる。その一端が、ⅡとⅢから分かるだろう。

なおヨーロッパで開催される社会事業国際会議は英独仏の三ヵ国語を慣例で用いるが、1920年代末になるとソーシャルワーク専門用語は英語優先になる(Myers/Kraus[1932])。ただし本稿では、ザロモン評伝の記載との兼ね合いもあり、原則として社会事業教育・社会事業学校と記す。1920年代以降の比較ソーシャルワーク教育史に関しては、文脈に応じてソーシャルワークを用いる。

Ⅱ．国際ソーシャルワーク教育年表の解題―ザロモンの対処を例にして

年表には1899年、1908年、1932年、1937年にザロモンの名が登場し、ベルリン校は1899年、1908年、そして1932年に事項としてある。むろん2001年刊行の『国際ソーシャルワーク』巻末に掲げられる年表であるから、学校にアイデンティを重ねたがるザロモンのような思い入れはないはずなのだが、年表作成者が用いる英語文献の年代事項には、過去の学校組織・職能団体の意向が投影されている[3]。ここより意図せざる結果として英米圏情報が、とりわけ合衆国情報が優位になる。以下では、この英米圏歴史叙述に偏在する年表に、ドイツのザロモンが多出する仕組みを読み解いていく。

Ⅱ－1. 英米圏歴史叙述へのザロモンの対処ⓐ―セツルメント紹介に込めた意図

1）セツルメントという社会事業「成立」の指標の読み方

ザロモンの名は計5回登場する。断トツ多い。ザロモンが国際ソーシャルワー

ク教育界の第一人者だからと読んでいい。ただし、記載は戦前に偏る。これはナチ期を境にドイツ情報が寸断され、ヨーロッパ大陸型社会事業教育モデルが忘却されていくことを物語る。

ドイツ社会事業教育に関する事項は、第一次世界大戦前に早くも2回登場する。1899年の女性のための1年間のトレーニング・コースと、1908年最初の社会事業学校設立の記載である。

それ以前では、ヨーロッパは1856年に慈善国際会議が出てくるが、おおむね英米の事項が大半を占める。他の年表でもそうなのだが、必ず登場するのは、トインビー・ホールとハル・ハウス。セツルメント事項は、社会事業「成立」の指標とされ、援助論や運動論の起点とされる。欧米社会事業・教育論では定説になっている。邦語文献の欧米情報でもそのように描かれる。しかし、ドイツ側から見れば、セツルメントを過剰に出す記述には、なじめない。

これは独語文献で社会事業史を初めて読んだ1970年代半ばに、ふと疑問に思った点である。社会事業施設の一類型でしかないセツルメントが、英語文献では大々的に取り上げられるのに、独語文献にはない。なぜなのか、である。以来、欧米社会事業史を紐解くたびに、それが想起された。やや短絡的な設問になるが、背景を考えてみる価値は、比較ソーシャルワーク教育史試論なら許されよう。

そもそもセツルメント興隆の背景には、労働力としての移民の同化政策があることは、これまでの研究が指摘している。初期移民の送り手イギリスと、受け手の合衆国が、双方でセツルメントの重要性を唱和する。それを率いるのは、アングロ・サクソン系の価値観が支配的なエリートの一群。イギリスではオックフォード・ケンブリッジ大学教員と学生が参加するトインビー・ホールが、合衆国では大富豪の娘J.アダムズ（Addams, Jane）と仲間のエリート女性によるハル・ハウスが、セツルメントの代表格と目される。目立つといえば、これほどのトップ･エリート集団はない。メディアもこぞって「エリートの若者がスラムに飛び込み」と感激を表明する。セツルメントを率いる彼/彼女らも、この種の宣伝を計算に入れて、国内外で拡張を図る。こここより時代思潮である社会改良の運動モデルとして、ほどなく英米圏で社会事業が「成立」したの説明に

際しては、誰もが真っ先に取り上げる指標になる。

むろんセツルメントが評価に値する活動をしたことは、疑いの余地はない。が、それ以上に大富豪の子弟やトップ・エリートの若者がセツルメントを認知させしめる広報に尽力し、イギリスと合衆国の双方でその意義を唱和しあう情報戦略が、高い評価に繋がっている。合衆国の一代で財を築く富豪が競い合って、自分の名を冠する美術館や大学冠講座をつくる時期でもあった。

2）ザロモンが語りたかったこと―ハル・ハウスを引き合いに出す格付け戦略

ザロモンに話を切り替えよう。ザロモンには、英米圏情報にいい意味で「洗脳」され、イギリス貴族の博愛事業への関わりを高く評価しすぎる傾向があった。自伝でも英米セツルメント創始者への憧れと羨望を吐露する（Salomon[1983]87-95）。その理由はイギリスに比べて当時のドイツ貴族はさほど慈善･博愛事業に熱心ではなかったとされる。果たしてそれだけなのか。

ザロモンが自分はトインビー・ホールやハル・ハウスから多大な影響を受けたとする述懐には、疑問がある。彼女が率先して立ち上げるベルリン初の女性労働者ホームと比較させての発言であるからで、「社会的援助（社会事業）活動のための女性グループ（Mädchen- und Frauen-Gruppen für soziale Hilfsarbeit）」（以下、グループと略記）が母体になる同ホームは、小規模で、持続的な活動ではない。にもかかわらず、ザロモンは英米セツルメントの影響を声高に語る。「なぜなのか、何のために、そうしたのか」。

おそらく理由は次のようなことだ。ザロモンは1909年の合衆国初訪問で、シカゴのハル・ハウスに傾倒、程なく大西洋を越えてアダムズと親交を結ぶ。アダムズの醸し出す雰囲気に魅惑され、ハル・ハウスを素晴らしいと連発するザロモン。しかし、同時に社会事業関係者に知れ渡っているハル・ハウスと、ささやかな自分の女性労働者ホームを同列に置きたがる。どうも動機は、1899年のグループ1年制コースの位置づけにあるようだ。ベルリン校開校は1908年。9年の隔たりがあるのに、ザロモンの描く学校沿革史では、1899年からベルリン校は始まると強調される。

実はザロモンの生涯を通観してみて近年気づくのは、自身の箔付けとベルリ

ン校の格付けは常にリンクしている点だ。ならばザロモンは思いつくだろう。グループの女性労働者ホームの活動が、ハル・ハウスと同列と、他者が見なしてくれる場合の、メリットは計り知れないと。社会事業学校の開始は1908年ではなく、1899年なのだ[4]。それは1893年設立のグループの講習会が母体であるから、ロンドンやニューヨークの学校と同じく早くから社会事業専門教育をしているのだ云々……。グループをほめそやし、ハル・ハウスを引き合いに出す語りから、国際評価を意識するザロモンの本音が聞こえてくる。

一種の自作自演に近い学校神話なのであるが、それは国外に速やかに広まり、早い段階で日本にまで伝わる。『国際ソーシャルワーク』巻末資料の年表作成で参照された英語文献のルーツは、国際社会事業会議の英語版会議録のはずで、第1回、第2回会議録に盛り込まれる社会事業専門教育／ソーシャルワーク教育情報は、ザロモンの編纂による。初期社会事業学校の御三家のような格付けが記載されているから、本稿末尾の年表にもそのまま盛り込まれていくのではないか。ロンドンとニューヨークとほぼ同時期に設立され、フェミニストが率いる進取の気風に富む学校云々として。本年表の情報ルートを、1920年代にまで遡及して検討していない段階では、これは推測の域を出ないのであるが……。

1913年夏、アダムズ著『ハル・ハウスの20年（Twenty Years at Hull-House）』独語版の刊行のための序文を、E.ミュンスターベルク（Münsterberg,Emil）の娘と、ザロモンが書く（Sklar/Schüler/Strasser[1998]172-174）。同年の秋から暮れにかけてのザロモンは、1893年に設立されたグループの20周年記念行事にも没頭し、グループの『社会事業活動の20年（Zwanzig Jahre Soziale Hilfsarbeit）』を刊行する（Salomon[1913]）。興味深いのは書名と年度である。『ハル・ハウスの20年』と『社会事業活動の20年』（傍点筆者）。そっくりな書名。独訳序文を書く年度と、グループ20年史刊行時期の符号。これは偶然だろうか。

ハル・ハウスの独訳刊行はやや紆余曲折の末に実現したとされる。序文を書くのは二人。ミュンスターベルクの娘とザロモンである。が、独語版刊行の御膳立てをしたはずのミュンスターベルク自身は、1911年に亡くなっている。刊

行経緯を知る証言者はいないから、以後はザロモンの独り舞台。1913年、グループ創設20年記念行事を盛り立てるには、ハル・ハウスと同格に位置づけるのが一番。その手っとり早い方法が序文執筆であり、グループ20年史刊行であったのではないか。

青春の思い入れのあるグループの記念冊子の構想は、少なくとも1911年には脳裏にあったはずだ。ハル・ハウスがグループと酷似していると、1911年12月アダムズ宛書簡で臆面もなく書くのだから（Sklar/Schüler/Strasser[1998]169-171）。

後日談もある。ハル・ハウスにグループを重ね合わせたがる一方で、グループが第1次世界大戦からヴァイマル期に急速に縮小し、解体していく経緯には、彼女は一言もふれない。グループ活動の終結に関する史資料は、管見の限りではない。1913年、グループ20周年記念冊子には、ドイツ語圏全域に同種の女性ボランティア組織を広めるとの意気込みで、輝ける未来図を描き、グループがその歴史の先陣を切ったと豪語するのに、である。

この辺のボランティア組織を束ねる言説戦略は、「母性」言説を駆使してBDFフェミニズム論に肩入れする若き日の姿を彷彿させる。アダムズの名声を1911年にグループに援用するやり口や、グループの未来は語れても、それが縮少するならば沈黙するザロモン。ここからは、原稿料を稼ぐと同時に、経歴も輝かせたがる性癖が透けて見える。国内での自分の仕事を有利にするには国際評価が大切なのだとの思いは、1911年暮れにはすでに脳裏にあり、1913年には戦略の方向は定まっていたと、思う[5]。だからこそ、私財をはたく形で同年、ザロモンは、立派な、初期社会事業学校の御三家に相応しい校舎建設を決意する。

従来、ザロモンへの高い国際評価は、1917年から討議に付される福祉職国家（州）資格制度をテコにし[6]、1928年パリ国際社会事業会議の準備過程で参加希望の各国との交渉に当ることで、知名度は一気に高まるとされてきた。この経緯自体には筆者も異論はない。が、総会講演者選定や分科会課題設定等を仕切るザロモンには、ベルリン校と自身の社会事業・教育論を売り込む姿勢がなおも付きまとう。相変わらずの自身の箔付けと、ベルリン校の格付けのリンクぶり。むろん、この種の売り込みになくしては、年表に5回も名前が登場する程の

国際ソーシャルワーク教育界の寵児にはなりえなかったのであるが。

ここでセツルメント事項についての解題の小括をしておこう。トインビー・ホールやハル・ハウスは、今後も動かざる社会事業「成立」の指標として、社会事業史の筆頭事例であり続けるだろう。だから若きザロモンがそれに共鳴し、そうありたいと願う気持ちは分かる。しかし、シカゴの観光名所にもなるハル・ハウスと、ささやかなグループの活動。フェミニストの意気込みは同じでも、比較対象にはならない組み合わせ。願いを自身のグループの活動に連ね、ベルリン校創設にも援用し、ハル・ハウスと同じ軌道にあると説明するには、かなりの無理があると言わざるをえない。事実とは程遠い。ベルリン校が私塾の域を超える組織になるのは、1911年か、12年頃のことであるのだから。ここより、日本社会事業史がともすれば具体的な裏付けなくして、すぐに欧米モデルと比較させたがる研究手法の問題点も見えてくるように思う。

Ⅱ－2. 英米圏歴史叙述へのザロモンの対処ⓑ—ドイツ「植民地主義」の特異性とザロモンの国際性の偏り

世界の社会事業学校成立情報に関しては当代随一の知見を持つと評されるザロモンの、その国際性の偏りにも、ここで少し言及しておこう。

年表には、なぜ、こんなにも早い時期に社会事業学校が設立されるのかと、疑問に思う国・地域がある。主に植民地の重要拠点に、上からの移植される形で学校が設置されるからと読んでいい。設立を年表から拾うと次のようになる。

1922年北京にトレーニング・コース、1924年南アフリカのケープタウン大学に付設で、翌25年にはチリのサンティアゴでラテン・アメリカ最初の学校が設置されている。同年、ポーランド自由大学にも設置。1936年にはインドのボンベイと、エジプトのカイロにも学校ができる[7]。

欧米先進国で社会事業制度化がほぼ定着した時期とはいえ、その圏外の国・地域で1920年代から1930年代にかけて学校が設立されていく。これは比較ソーシャルワーク教育史試論のたたき台として、格好の素材になる[8]。とりわけ植民地

政策の重要拠点に社会事業学校が設立される意味は大きい。英語のテキストが真っ先に採用されるからで、英語でのソーシャルワーク専門用語と情報伝播はスムーズになる。合衆国で学位論文を書き、母国の社会事業学校教員となり、ソーシャルワーク系科目を担う例も多かった。講義・演習で英語が多用される校内の雰囲気。洋行帰りの社会事業学校教員や現場経験のほとんどない教員が、1930年代、40年代に、母国の貧しい人々の暮らしに即した実習教育にどこまで取り組めたのか。調査すべき課題になろう。

つまり植民地で早期に設立される社会事業学校教育から、英米圏情報がグローバル・スタンダートになる背景が読み取れる。こうしてザロモンが活躍できなくなる1933年以降は、合衆国ソーシャルワーク教育情報だけが世界を席巻することになる。

ドイツはこれとは違う。ドイツ「植民地主義」の特異性があるからで、植民地獲得に遅れをとるドイツにあっては、ザロモンの目線はヨーロッパと北アメリカにしか向かない。もしも植民地に女子社会事業学校をの依頼があれば、彼女ならば率先して取り組んだと思うのだが。しかし、ドイツは市民女性主導で、しかも一国性そのものである福祉職国家（州）資格を早々と制度化し、かつ植民地での活動は宗派系の手に託されたためか、欧米圏外での学校設置には関与はしない。少なくとも、ザロモン社会事業・教育論には出てこない。

Ⅲ．ヨーロッパ大陸型モデルを模索をするザロモン—その国際評価をめぐって

ドイツ社会事業教育モデルが合衆国に匹敵するかのような見せ場づくりが、1920年代のザロモンの脳裏にはあったと思う。以下で、年表の国際会議事項に即して解題を行う。

Ⅲ—1．ザロモンの国際評価を賞賛と忘却の狭間で考える

1）ザロモンへの高い国際評価が出てくる二つの前提条件

1920年代初頭にすでにザロモンロモンの名前が国際的に知れわたる条件はできていた。パリ国際社会事業会議の準備段階で彼女がドイツ・モデルを提示できたのは、以下の条件があったからである。

一つはドイツがヨーロッパ大陸では範を示す職業教育制度を整備していた点である。国家（州）による職業資格認定に則って、ベルリン校を雛形にして福祉職資格の論議を始めるのが1917年。カリキュラム再編も並行して行う。これに注目を寄せる外国人は多く、結果的に1920年代を通じてザロモン社会事業・教育論も過熱気味に賞賛される。各国の社会事業関係者は、ザロモンをヴァイマル社会国家建設の一翼を担う福祉職関連情報の生き字引と見なす。その名声は遠く日本にも及び、1920年代初頭から日本人のベルリン校見学者が出てくる。

もう一つは、フェミニストの国際連帯の支援である。この点では、ドイツ女性団体連合（Bund Deutscher Frauenvereine, BDF）が、若きザロモンを社会政策分野の看板娘に仕立ててくれた意味は大きい。すでに第1次世界大戦前に、それも2回も彼女の名前が年表に登場するのは、このBDFの後押しなくしてはありえない。

そしてここからが重要なのだが、それと袂を分かつ1920年代でも、ヨーロッパ大陸で確たる地位に就けたのは、BDFも加盟していた国際女性会議（International Council of Women, ICW）の大西洋を越える女性ネットワークがあったからだ。BDF保守化に伴って、ICWとの亀裂は広がる一方であった[9]。が、ICW会長のI.アヴァディーン（Aberdeen, Isabel）の右腕と誰もが認めるザロモンの際立つ実務能力は、新たな国際舞台でも発揮される。BDF脱会後はヴァイマル社会国家の社会事業・教育論の論客として、あるいは国際平和の象徴的存在として、「ドイツのジェーン・アダムズ」と絶賛されるまでになる。合衆国側から発するこの賛辞に、「私なんて」と謙虚な姿勢を見せるザロモン。が、嬉しさを隠しはしない。だからここでも疑問が付きまとう。ある日、突然に、合衆国側がそう絶賛するのかと。1911年暮れにアダムズ宛て私信で、グループはハル・ハウスと似ていると臆面もなく書くザロモンの過去を知るならば、合衆国メディアにそう言わせしめる下準備はしていた可能性は捨て切れない。『ハル・ハウスの20年』独語版刊行と、グループの『社会事業活動の20年』とを提示し

て、「似た歴史性を持つわ」とメディアに売り込んでいたかもしれない。その検証は今後の課題になるが、以下では彼女の国際評価の真偽が分かる例を、一つだけ出してみよう。

2）国際通とされるザロモンの語学力

ザロモンは英独仏の三ヵ国語に秀でていたとされる。元秘書のペイゼァー（Peyser, Dora）は1958年伝記でそう証言し、書き残す。時には通訳も買って出るくらいに巧みだったと。

ペイゼァーは以下のように記す（Peyser[1958]104）。

1928年パリ国際社会事業会議では、「『会議の初心者達』の中には、国際会議で必要とされる技術に欠ける人が多かった。とりわけ、言葉に苦労し、通訳の助けをかりねばならなかった。だが、ザロモンはICWでの長年の経験から、国際会議に必要な技術に長けていた」とし、さらにペイゼァーは具体的な例を出す。「それはソーシャルワーク教育を扱う第2部門の午後の分科会で生じた出来事であった。突然、若いフランス人通訳が、緊張しすぎて通訳を続けることができなくなり、頭をかかえて泣きじゃくった。講演はとてもダラダラとしたものであった。講演者は通訳のことなぞおかまいなしに、話を続ける。何度も同じようなことを繰り返していた。ザロモンは、その間、幹部席で誰かとささやき声で話していた。あたかも彼女は少しも講演を聞き入っていないかのように見えた。だが、その長ったらしい講演が終わった時、ザロモンは立ち上がり、まとまりの悪い内容を、手短に要約して通訳した。その際、彼女は、講演者に『本当にあなたはそうおっしゃったのですね』と優しく問いただし（Peyser[1958]104）、その同意を確かめていた。3ヵ国語を自由に使いこなすことができたザロモンは（傍点は筆者）、すばらしい通訳の技術を示すことができたのである」と（Peyser[1958]104）。

これは眉唾だ。国際会議に慣れていたし、このパリ会議では事前に講演者の報告書を入手していたからできた芸当であった。ソーシャルワーク教育分野の報告は、今でもそうだが、まとまりのない内容も結構あるから、まともに逐語訳的に通訳するのが難しい場合もある。逆に、ザロモンのように前もって報告書に

眼を通すことができ、当該講演者の話し方の癖も知っている場合は、「ああ、あの人はいつもだらだらと話すから」程度で、適当に要約ができたはずだ。

これはザロモンの語学力の高さの証明にはならない。卑近な言い方をすれば、秘書の前で格好をつけたに過ぎない。この辺の演技力も、国際舞台での生き残り方といえよう。

ここよりニューヨーク社会事業学校の講義の中断も、その語学力が連続講義には適していなかったからではないかと、推測されうる[10]。というのは当時のヨーロッパ大陸のソーシャルワーク関連の国際会議で使用される英語は高水準ではない。参加者の英語の語彙数は少ない。ザロモンが1920年代、北欧フェミニストとの交流が多いのも、この点で肯ける。独語に堪能な人が多かったし、おおむね分かりやすい英語で情報交換ができるからである。

国際会議に出かけていく時期、1904年以降でも「私の英語は当時はまだひどくて」と述懐するくらいだ（Salomon[1983]70）。当時の年長の女性には、通訳として修得した語学を駆使できる場はほとんどなかったから、傍目にはザロモンの英語力でも完璧に見えた可能性が強い。

つまり国際通といっても、語学力が伴っていたわけではない。ここに競争相手が少ない時代のザロモンへの高すぎる評価の一例を見る。驕慢さやほめそやしに、ザロモンといえども慣れてしまう怖さもあった。

Ⅲ－2. 比較ソーシャルワーク教育史試論のたたき台になる初期社会事業学校と国際社会事業会議

なぜ、社会事業教育のヨーロッパ化を目ざしていたはずのドイツが、1920年代まではアメリカ・ソーシャルワーク教育とほぼ互角であったはずのドイツが、かくも看過されているのか。この間に一体、何があったのか。これもザロモン個人の資質から見ていくことにしよう。

1）屈指の名門校とされるベルリン女子社会事業学校の内実―初期社会事業学校情報の加工

ヨーロッパ大陸が1920年代にソーシャルワーク教育を模索する際は、ザロモ

ンとその拠点校ベルリン校がモデルになる。その位置づけはほぼ正しい。学校沿革史や紹介冊子の類には、そう盛り込まれるのだから。同じく、ザロモン社会事業・教育論も高く評されている。これも間違ってはいない。20世紀初頭から1920年代にかけて刊行される英語・独語文献を概観しても、量で群を抜くのはザロモンなのだから。1933年に公職活動を禁止されるまでの30数ヵ年に及ぶ執筆活動の長さも、欧米社会事業界では先例がない。しかし、全てを鵜呑みにしていいのか。そもそも、何を根拠に名門校との国際的な格付けが定まるのか。同時期の国内外の他校に比べて、ベルリン校は格段優れた点があったのか。あるとすれば、それは何なのか。

年表でザロモン関連事項が突出して多い点と、ベルリン校の実態とを比較照合させ、問い詰めていくと、幾つもの疑問が浮上する。学校は発足時はかなり脆弱体質で、常勤教員もザロモン一人の時期が長い。ベルリン市が教員給与を引き受けるまでは、ザロモンは乏しい私財と原稿料を幾度となくつぎ込む。私塾に近いのだ。

それなにの早々とドイツ語圏屈指の名門校と評されるのはなぜか。ザロモンの資質に限定して考察すると、次の二点に行き着く。

一点目は国際的な人脈に恵まれる点である。ザロモンは1920年代、ヨーロッパ大陸型といえる職業教育 - 雇用の連結モデルを提唱していく。穏健派フェミニズム論の若き論客として頭角を現す彼女は、ベルリン校の開設にこぎつける翌年、1909年にICW書記に抜擢され、実質は事務局長として各国組織を束ねていく（Salomon [1983] 112）。秘書がいるとはいえ、煩雑な手紙のやり取り、訪問客の接待、会議録の整理等々、人が嫌がる雑用を淡々とこなすのがザロモンであった。その際立つ実務能力はICW中枢の人脈掌握に生かされ、まずイギリスとカナダで、次いで北欧で、フェミニストと親交を結ぶ。そして彼女らが1920年代から1937年までのヨーロッパ大陸でのザロモンの仕事を脇から支えていく[11]。

つまりザロモンが1920年代に、国際ソーシャルワーク教育界で高い評価を受けるのは、近隣小国のICWの人脈が、新生ヴァイマル会国家に民主主義と平和の夢を託し、二度と戦争はしたくないとの、願いと無縁ではなさそうだ。

二点目は、ザロモン自身がその著作で初期社会事業学校の専門教育に関して、情報操作を施した可能性である。セツルメント情報とグループを重ね合わせる戦略と同様に、後からザロモンが自作にベルリン校はヨーロッパ屈指のと書き入れ、繰り返していくのではないか。ザロモンが国際舞台で披露する演技力はなかなかのもの。英独仏の三ヵ国語を自在に操ると見なされ、国際会議開催の煩雑な事務局長役を積極的に買って出る。外国社会事業学校情報への関心も異様に早く、20世紀初頭から論稿を練る。つまり初期社会事業学校の各国比較や成立経緯は、ザロモンが先鞭を付けるといっても過言ではない。

こうしたザロモンの初期社会事業学校情報を加工して伝達させることもできる特異な位置と、何よりもその時々の国際会議で自分の学校を巧みに売り込める資質とが相まって、ヨーロッパ大陸型社会事業教育モデルの提示は彼女が最適との評価が不動のものになっていく。

2) ソーシャルワーク教育のヨーロッパ化の可能性—パリとフランクフルト会議の意味

ドイツは1920年代まではアメリカ・ソーシャルワーク教育とほぼ互角に見えた。第1次世界大戦前ならばともかく、20年代末でもそう見えるのは、やはりザロモンの手腕である。合衆国ソーシャルワーク関連情報の収集も1920年代初頭から再開し、大戦によるドイツの遅れを取り戻すべく尽力する。

しかし、他方では別の方向も重視する。ヨーロッパの伝統的な職業教育制度をふまえつつ、福祉職国家（州）資格-雇用を連結させる教育モデルを熱心に提唱するからだ。これがソーシャルワーク教育のヨーロッパ化の雛形になる。そのために1928年にパリで国際社会事業会議（International Conference of Social Work/International Conférence of Social Work; 1967年にInternational Council of Social Welfare, ICSW）を開催、翌1929年にはベルリンで国際社会事業学校連盟（Internationale Vereinigung der Sozialausbildungsstäten; 現在のInternational Association of Schools of Social Work IASSW）を結成するのが、ザロモンその人であった。

ヨーロッパ大陸では、1933年までドイツ・モデルがアメリカを凌いでいた。学校数でも1920年代初頭までは、アメリカとほぼ互角であった。張子の虎に近い実態がベルリン校にはあるとはいえ、これは初期社会事業学校格付けの成功を意味する。彼女はまた1920年代半ばに、合衆国カリキュラムの新動向を見越して、ヨーロッパ文化圏に即した社会的公正を目ざす援助論科目を教育の柱にする構想も打ち出す。そのために各国教育情報を誰よりも早く、熱心に収集し、年表にも記されているが1929年、10ヵ国の社会事業学校代表をベルリン校に参集させる。各国社会事業学校が一堂に会し、カリキュラムや職業像の共通認識づくりをする最初の討論の場になった。その課題は、戦後国連による世界のソーシャルワーク教育調査に引き継がれる。

しかし、こうしたザロモンの結集の呼びかけにもかかわらず、ソーシャルワーク教育のヨーロッパ化の牽引力であるドイツの主導権は、この時期を境に失われていく。1932年の第2回大会はフランクフルトで開催されるが、経済不況は合衆国からの参加を激減させる。これはザロモンが仕切る最後の国際会議であり、ある意味ではヨーロッパ大陸型教育の最後のモデル提示の場にもなった[12]。

アメリカ・ソーシャルワーク論の自己決定を尊重し、個の自己責任を重んじる援助技法中心の方法論とは異なるもう一つの選択肢が、すなわち社会的公正を重視する援助論が1920年代後半にヨーロッパで模索され、ザロモンもその方向を目ざしていたことは事実であろう。後に亡命するザロモンは、ニューヨーク社会事業学校で講義を担当するが、受講生からの相次ぐクレームで教壇を降りる。その理由の一つに、合衆国とヨーロッパ大陸の援助論を支える福祉思想の違いを挙げることができるだろう。

Ⅳ．まとめにかえて

以上、合衆国側情報に偏在する年表からザロモンの位置を読み直してみた。年表解題をする形の論稿であり、社会福祉史教材の研究メモに近いのだが、他国の目線を意識するザロモンを捉えた点では、幾つかの発見はあっただろう。ドイツ福祉職創出を担うとの決意を固めるザロモンの位置を、比較ソーシャル

ワーク教育史上に引き寄せていくと、次の二点が確認できる。

一つは、この新興の職業が、その職業像の不確実性や、職業アイデンティティの曖昧さにもかかわらず、否、それだからこそザロモンによって（準）公務員型福祉職がヨーロッパ大陸型社会事業教育モデルにもリンクさせられる点であり、他方ではそれがヨーロッパ大陸の社会事業学校に影響を及ぼすにもかかわらず、ある時期を境に急速に看過される点である。後者はナチ期に公職追放云々の従来の説明だけでは読み解けないだろう。かなり早い時期にザロモンの学校構想には、ベルリン校をロンドンやニューヨークの初期社会事業学校に匹敵させんとする決意が入っていた。他国への売り込みも上手かった。こうしたお手盛りで経歴を飾る性癖なくして、ベルリン校の名声が、ヨーロッパ大陸のみならず、合衆国や日本にも伝わることはなかっただろう。たとえザロモン個人の資質に、あくなき権力欲はないとしても、その社会事業・教育論にも、BDFフェミニズム論と似たポリティクスが入り混じっていた点は看過できない。

これをふまえれば、ザロモンが1933年に公職追放されてからは、各国の知己からの依頼でソーシャルワーク教育国際調査の仕事を進め（Salomon[1937]）、スイス滞在などの厚遇を受け続ける背景も分かるし、同時に亡命後に合衆国ソーシャルワーク教育界が冷遇する経緯も理解できる。ちなみに、1937年のザロモン著『ソーシャルワーク教育—国際調査に基づく社会学的解釈（Education of Social Work: A Sociological Interpretation Based on an International Survey）』調査は、年表の1950年と1955年に記された国連ソーシャルワーク教育調査の基礎資料になるものである。これはザロモン社会事業・教育論の着眼点の良さを物語る。

ただし、本稿ではザロモン社会事業・教育論には立ち入らずこの間の推移を年表から概観したものにすぎない。本格的な比較ソーシャルワーク教育史に取り組むには、合衆国やイギリスで、ザロモン他のドイツ語圏関係者が何を見聞し、誰と交流したのかの調査が不可欠であるし、当然のことながらベルリン校をドイツ語圏以外の国がどの程度にモデルにしたのかも課題になろう[13]。だからこの程度の年表解題でもって、冒頭の「いかなる条件で福祉の職業化が始まったのか」の解明ができるなどとは、とうてい思わない。

それでも比較ソーシャルワーク教育史のまともな著作がない現状では、社会

的公正を基軸にする福祉職のヨーロッパ大陸型教育モデルの歴史性を知る道標にはなるし、英米圏情報を鵜呑みにするリスクも回避されよう。

本稿が比較ソーシャルワーク教育史試論に該当すると思うのは、定説とされる事項を疑い、他国の目線を持つことで初めて気付く、そういう年表解読の仕方なのである。

（註）

1）この共時性は博愛事業が築く大西洋を超える情報共有による。本稿との関連では国際ソーシャルワーク教育史（例えばKniephoff-Knebel[2006]）と、フェミニズム史（Sklar/Schüler/Strasser[1998]）で素材になる資料解題的な成果が刊行済み。

2）ザロモンの采配がここでは際立つ。1920年代半ばにパリ会議開催の準備に入り、1932年第2回大会はフランクフルトで開催。これについては彼女が事務局長的なポジションで開催準備をする第1回（Internationale Konferenz, Paris 1928[1928]）、第2回国際社会事業会議録・報告冊子が詳細な情報を提供（Internationale Konferenz, Frankfurt 1932[1933]）。1933年ナチ政権下で彼女が国内外の要職を外されるまでは、中欧·東欧の社会事業学校を束ねる中心者として、同会議を資格制度化や社会事業学校教育の各国情報交換の場とした。第3回大会は非公式参加の形になるが、国際評価は反ナチ派によって逆に高まる（Internationale Konferenz, London 1936[1938]）。

3）欧米社会事業・教育論の主流と目される論者は、学校制度拡充と呼応する形で活躍する。これは世俗化の潮流の中での息の長い慈善論の論拠づくりとは異なる位相。ザロモンのベルリン校の自作自演的な格付けに関する大要は、指摘済み（岡田[2001]; Okada[2008]他）。

4）本稿では扱わないが、1899年の1年制コースをザロモンがベルリン校の出発点と見なす見解には疑義もある。ベルリン校設立前の1905年に、ハノーヴァーでプロテスタント系女子社会事業学校が開設されるからで、高額な授業料や初期は良家の子女の入学が目立つ点はベルリン校と似ているのだが、ローカル・レベルでの福祉職養成に徹した学校。初期ベルリン校卒業生の現場回避とはやや対照的な学校づくり。フェミニズム論よりも、隣人愛に基づく実践が重視された（Reagin[1995]112-117）。

5）ザロモンの文章は論理的で、明晰。感情的な表出は稀である。若き日のフェミニズム関係の論稿はBDFのフェミニン系権力に気遣うためか、「母性」言説のポリティクスが充満するが、さらっと書くスタイルでもある。加えて組織の中で生きる実務派官僚タイプであるから、ザロモンの真意を読み解くには、その時々の仕事と人間関係から検討する手順が不可欠になる。ここよりヴァイマル期に「ドイツのジェーン・アダムズ」と賞賛されるに先立って、事前の根回をしている可能性も考えられ

るが検証はできていない。ただ1911年からのハル・ハウスの独訳刊行準備で、アダムズに過剰にアイデンティティを重ねる姿勢は読み取れる。

6) 1917年、福祉職の国家（州）資格制度に乗り出す。「職業教育の場の設立でもって職業基準の発展が決定的にまで推進される事態は、他の職業にはない」と言い切るザロモン（Salomon[1917]263)。「職業教育の場」たるベルリン校を「職業基準の発展」と「推進」モデルとして（傍点筆者)、資格制度と一体化させる戦略である。職業像の不確実性を払拭させるべく、官僚を説き伏せてみせるとの静かなる決意が読み取れる。

7) 南アフリカやインドは当然のことながら、社会事業段階に到達はしてはいない。註1とは位相が異なる。これは社会事業を「成立」させる条件が整っていない時期でも、植民地では欧米流の職業化が前倒し的に生じやすいことを物語る事例になる。

8) 東アジアやアフリカで近代慈善事業が移植される前史があり、イギリスやフランスが、次いで合衆国が、現地の養成教育を主導する。植民地での欧米式養成教育に関しては、慈善史からの着手はあるが、社会事業史ではまだ注目されていない。

9) ICWフェミニストの国際ネットワークを生かす形でのザロモンの教育構想が、どのようにヨーロッパ大陸諸国が主導する国際社会事業会議開催に繋がるのかについては、ザロモン研究では未着手のまま。ICW会議では社会政策・社会事業関連の分科会テーマや議論は多いのに意外なほど成果はなく、概括書のICW通史（International Council of Women[1966]）と、類似国際女性組織との比較研究に記されている程度（Rupp[1997])。

10) ニューヨーク社会事業学校の講義中断の理由は幾つかあろうが、例えば、語学力以外には福祉哲学的な講義に馴染んでいない学生との間で、齟齬があったのではないか。翻訳語の表記は同じでも、歴史的文脈の中で生成する言葉づかいについて、とりわけ文化を背負う職業倫理や社会的公正についての内容を、哲学的素養に欠けるニューヨーク社会事業学校の学生に伝達するのは難しかった。国際会議では十分通用する語学力を持つザロモンであっても、である。また精神分析に依存する臨床ソーシャルワークに傾倒する学生が多く、かつニューヨーク市に目立つドイツ系市民のナチ支持者へのアメリカ市民の嫌悪感が膨らんでいた時期である。無一文に近く、老いの目立つユダヤ女性の講義に魅力は感じとれなかったのではないか。こうした二重三重の偏見もザロモン講義の中断に繋がると推測される。

11) 国際通とする先行研究はあるが（Sklar/Schüler/Strasser[1998]; Schüler[2004])、ザロモン個人の資質を査定はしていない。1909年から1919年までのBDFとICWとの蜜月時代は、実質ザロモンが仕切る。1920年、BDF脱会以降のザロモンは、ICWの支援を受ける。国際ソーシャルワーク教育のヨーロッパの代表と目される背後には、フェミニストの何たるかが問われる集団性暴行事件をめぐるBDFスキャンダルも絡ん

でいたようで、これに抗議する形でICWがザロモンに肩入れをするからである。特に近隣小国のフェミニストの支援が、ザロモンに国際社会での仕事を提供し続ける。1919/20年のザロモンとICWの関係強化の経緯は今後の研究課題。

12）ヨーロッパでは1920年代末から英独仏の三ヶ国語を国際会議公用語としてきた伝統の垣根を下ろすかのように、英語によるソーシャルワーク関連用語の表記統一の方向性も出される。フランクフルトで開催された第2回国際社会事業会議が、移行実験の場となる。国際ソーシャルワーク教育で、英語優先の専門用語表記の会議録・報告が共通言語になる始期は、1932年。その成果は独英・英独ソーシャルワーク専門用語辞典の刊行（Myers/Kraus[1932]）。

13）「母性」言説の国ドイツにあって、ザロモンは福祉の職業化の打開策を福祉職国家（州）資格制度と女性公務員雇用拡大に求める（岡田[2009]他）。ザロモンは早い段階でBDF国際ネットワークの後ろ盾も見込んで、ベルリン校を拠点にするヨーロッパ大陸型社会事業教育モデルを構想し、準備を進める。BDF上部組織のICWとの関係づくりが、BDF国際ネットワークの最たるものであるのだが、本年表にはこの記載は1909年を除けばない。ソーシャルワーク教育が女性史/ジェンダー史の知見を看過してきたからであろう。

【ザロモンに関わる国際ソーシャルワーク教育関連主要文献】

Healy, Lynne M. (2001) International Social Work: Professional Action in Interdependent World. New York: Oxford University Press.

International Council of Women(1966) Women in a Changing World: The Dynamic Story of the International Council of Women. London: Routledge & Kegan Paul.

Kniephoff-Knebel, Anette(2006) Internationalisierung in der sozialen Arbeit: Eine verlorene Dimension der weiblich geprägten Berufs- und Ideengeschichte. Schwalbach/Ts.: Wochenschau Verlag.

岡田英己子（2001）「ヴァイマル期におけるA.ザロモンの社会事業理論」『人文学報』東京都立大学人文学部, 319号, 1-41.

Okada,Emiko(2008) Alice Salomon in Japan: Salomons Ausbildungskonzept auf dem Weg in die japanische Sozialarbeit. In: Soziale Arbeit,57 Jg.,10-11/2008, 447-452.

岡田英己子（2009）「A.ザロモン像再考：ボランティア・グループの二種類の「呼びかけ」を手がかりにして」『人文学報』首都大学東京都市教養学部人文・社会系/都立大学人文学部, 409号, 1-21.

Peyser, Dora(1958) Alice Salomon: Ein Lebensbild. In: Muthesius, Hans(Hg.) Alice Salomon: Die Begründerin des Sozialen Frauenberufs in Deutschland. Köln/Berlin: Carl Heymann Verlag,9-121.

Reagin,Nancy R.(1995)A German Women's Movement: Class and Gender in Hanover, 1880-1933. Chapel Hill/London: The University of North Carolina Press.

Rupp, Leila(1997) Worlds of Women: The Making of an International Women's Movement. Princeton N.J.: Princeton University Press.

Salomon,Alice(1913) Zwanzig Jahre Soziale Hilfsarbeit. Karlsruhe: G.Braunsche Hofbuchdruckerei u. Verlag.

Salomon,Alice (1917) Die Ausbildung zur sozialen Berufsarbeit. In: Die Frau,24Jg., Die Frau,24Jg., Nr.5,263-276.

Salomon, Alice(1937) Education of Social Work: A Sociological Interpretation Based on an International Survey. (Published by the International Committee of Schools for Social Work with the support of the Russell Sage Foundation), Zürich/Leipzig.

Salomon,Alice(1983) Charakter ist Schicksal: Lebenserinnerungen.(Aus dem Englischen übersetzt von Rolf Landwehr,Hg.von Rüdeger Baron u. Rolf Landwehr. Mit einem Nachwort von Joachim Wieler)Weiheim/Basel: Belz Verlag.

Salomon,Alice(2004) Character is Destiny: The Autobiography of Alice Salomon. (edited by Andrew Lees)Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Schüler,Anja(2004) Frauenbewegung und soziale Reform: Jane Addams und Alice Salomon im transatlantischen Dialog,1889-1933. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Sklar, Kathryn Kish/Schüler, Anja/Strasser, Susan (eds.)(1998) Social justice feminists in the United States and Germany: A dialogue in documents 1885-1933. Ithaca, NY [u.a.]: Cornell Univ. Press.

【第1回～第3回国際社会事業会議録・報告冊子】

Internationale Konferenz für Wohlfahrtspflege und Sozialpolitik.Paris, 9.-13.Juli1928,1.Band, Ⅰ.und Ⅱ.Sektion. Karlsruhe: Verlag G.Braun 1928. (略記: Internationale Konferenz, Paris 1928) (Der Konferenzbericht besteht insgesamt aus 3 Bänden)

Zweite Internationale Konferenz für Soziale Arbeit, Frankfurt a.M.,10.-14. Juli 1932. Karlsruhe: Verlag G.Braun, 1933. (略記: Internationale Konferenz, Frankfurt 1932) darin: Anhang 6: Tagung des Internationalen Komitees Sozialer Schulen, 15. und 16.Juli 1932 in Frankfurt a.M., Verhandlungsbericht, 775-808.

Myers,Earl.D./Kraus, Hertha (1932) Fachwörterbuch der sozialen Arbeit. Social Work Terms. Deutsch-Englisch, Englisch-Deutsch. (Hg.von der Zweiten Internationalen Konferenz für Soziale Arbeit), Frankfurt a.M.

Generalsekretariat der Konferenz (Hg.)(1932) Zweite Internationale Konferenz für

Soziale Arbeit,Frankfurt a.M.,10.-14 Juli 1932, Gesamtthema: Familie und Fürsorge. 1 Führer-Guide.

Dritte Internationale Konferenz für Soziale Arbeit, London, 12.-18.Juli 1936, London: Le Play House Press 1938. (略記: Internationale Konferenz, London 1936)

年表 Milestones in the International History of Social Work Around the World

出典：Healy, Lynne M.(2001) International Social Work. New York, 290-293.

1856	European International Conference on Charity and Welfare initiated[1].
1861	International Red Cross founded in Switzerland[2].
1869	Charity Organization Society founded in London.
1873	Octavia Hill conducts first training programs for social workers in England.
1877	Charity Organization Society begins in Buffalo, New York.
1884	Toynbee Hall opens in London[3].
1889	Hull House opens in Chicago.
……	……社会事業専門教育/ソーシャルワーク教育の開始……
1895	First paid employed social worker, Mary Stewart, is hired by the Royal Free Hospital in London.
1898	A 6-week summer training course for social workers in held in New York.
1899	**The first school of social work in the world is opened in Amsterdam**. The Institute for Social Work Training offered a full 2-year course, including field-work. **A training course for young women interested in social work is organized in Germany by Alice Salomon**[4].
1903	The School of Sociology, a 2-year social work course, grows out of the London Charity Organization Society trainings.

1904	The New York School of Philanthropy is founded (later to become the Columbia University School of Social Work).
1908	**First school of social work in Germany is founded by Alice Salomon.**
1909	**Social workers from several countries meet at the International Congress of Women in Canada[5].**
……	……第一次世界大戦……
1915	Jane Addams attends the Women's Peace Conference at The Hague and then travels to Berlin to meet with the german chancellor in an attempt to convince him to end World War I hostilities. Other delegates travel to other capitals involved in the war of nations.
1917	***Social Diagnosis*** by **Mary Richmond** is published. The book has a significant impact on the **professionalization of social work in Europe** as well as the United States.
……	……1920年代国際社会事業/ソーシャルワークの展開……
1919	Save the Children Fund is founded by Eglantyne Jebb in England. The International Labor Organization (ILO) is founded under the auspices of the League of Nations. It is the oldest of the UN specialized agencies.
1921	International Migration Service is founded with headquarters in Geneva and New York. It is later renamed International Social Service. Ida Pruitt begins medical social work services in a hospital in Beijing, China.
1922	Social work training is started in a new sociology department at Yanjing University in Beijing, with the assistance of Princeton University.
1924	The Declaration on the Rights of the Child, authored by Eglantyne Jebb, is adopted by the League of Nations. The first school of social work in Africa is opened at University of Cape Town in South Africa.

1925	The first school of social work in Latin America is opened in Santiago, Chile. The Training School for Social Work is founded at the Free University of Poland in Warsaw by Madame Helene Radlinska.
1926	Nagpada Neighborhood House, a settlement house, is opened in Bombay, India, by Dr. Clifford Manshardt.
1928	**The First International Conference of Social Work is held in Paris.** **The International Conference of Social Work (ICSW) and the International Permanent Secretariat of Social Workers, predecessor to the IFSW, are founded.**
1929	**The International Association of Schools of Social Work is formed with 46 member schools in 10 countries** (although it originated through the 1928 conference).
1931	**Jane Addams** is awarded the Nobel Peace Prize.
1932	**Alice Salomon** is awarded the Silver Medal for Merit to the State by the Prussian Cabinet, and the School she founded is named the Alice Salomon School of Social Work.
1936	The Tata Institute of Social Sciences is founded in Bombay, the first school of social work in India. Egypt opens its first school of social work in Cairo.
1937	**The first International Survey of Social Work Education is published. The survey is conducted by Alice Salomon** and funded by the Russell Sage Foundation[6]. **Alice Salomon**, stripped of all honors and her name removed from the school of social work is expelled from Germany by the Gestapo and begins life in exile in New York[7].
1938	The Moyne Commission, set up as a result of unrest in Jamaica, leads to expansion of social welfare and community development in the then British West

	Indies.
1939	The first technical assistance program of the U.S. government brings social work educators from Latin America to the United States for training.
1939-46	**All international meetings of social workers are suspended, including the 4th International Conference planned for 1940.**
1941	The Jan H. Hofmeyr School of Social Work is established in South Africa,the first school of social work for South African nonwhites.
1943	United Nations Relief and Rehabilitation Administration (UNRRA) is founded by 44 nations to solve the relief needs of the 35 countries invaded by Axis powers in World War Ⅱ.
1944-47	**Many social workers contribute to relief efforts in Europe** and China through the UNRRA.
1945	The United Nations is founded with 51 nations as members of the General Assembly. The World Health Organization(WHO)is established at the request of Brazil at the founding convention of the UN.
1946	UNICEF is founded.
1948	The UN adopts the Universal Declaration of Human Rights.
1950	First United Nations Survey of Social Work Education is published, authored by Katherine Kendall.
1952	Social work and other social sciences are abolished as fields of study in the People's Republic of China.
1955	**Second UN Survey of Social Work Education** is published.
1958	***Training for Social Work: Third International Survey*** is published by the UN. A landmark study, it explored the nature of social work and was authored by

	Eileen Younghusband. 以下、略す。

Healy, Lynne M.(2001) International Social Workの年表に一部加筆をして本稿に掲載

1 国際社会事業会議（International Conference of Social Work,ICSW）は1856年のヨーロッパ会議を社会事業/ソーシャルワーク教育の国際会議の起点と見なす。ナチ政権樹立時のICSW会長Alice G.Masarykova（チェコスロヴァキア赤十字会長,プラハ在住）も、1933年の第3回大会の準備段階からこれを強調。1936年第3回ICSWロンドン会議開催でも、ナチ高官の報告とエルサレムからの報告者との調整に苦慮。なおICSW公式会議ではザロモンはすでに門外漢の位置にあることが、第3回会議記録からは読み取れる。

2 ICSW創設の呼びかけ人は国際赤十字顧問であったベルギーのR.サンド(Sand, René)。

3 ロンドンのトインビー・ホール訪問で、アダムズはシカゴにハル・ハウスを建てる。ザロモンの女性労働者ホームも1894年のロンドン訪問が契機とされる。ただしドイツのセツルメント運動は英米圏と比べて規模も小さく、ザロモンが関わるセツルメントも短命。

4 当初は1年コース。

5 1909年、ザロモンはカナダで開催された国際女性連合（International Council of Women, ICW）に出席、同時にアメリカも初訪問、アダムズにも会う。

6 戦後日本の社会福祉界で、国際ソーシャルワーク教育情報の重要性を真っ先に認識するのが大阪市立大学岡村重夫で、ザロモンへの関心もここに発すると考えてよい。古典邦訳の社会福祉学双書にザロモンの代表テキストを選定、岡村監修で1972年、『社会福祉事業入門』(岩崎学術出版社)を刊行。岡村は山口正の部下の池川清との親交によって、戦前日本の社会事業がザロモンに寄せた関心･内実を熟知。池川は1936年第3回ICSW大会でロンドンでザロモンと対談。その前に文通を重ねる。

7 1942年に亡命先のアメリカで、ザロモン最晩年の著述と推測される「母の革命（The Revolution of the Mother）」を英語で執筆。ヒトラー･ムッソリーニ・スターリンを批判し、第１次世界大戦下でのアダムズを模倣するかのごとく、女性の連帯と平和主義を提唱（Salomon[2004]239-245）。